

TAKE FREE

BLUE+ GREEN JOURNAL

Okutama Town Official Magazine
奥多摩町公式タブロイド

この町に根をこころ。
Why We Live Here

#19

ISSUE Nineteenth



この町に根ざして

ある人は、静けさと人生の余白を求めて。
ある家族は、子どもと過ごす時間と環境を考えて。
はたまた、働き方や生き方を紡ぎ直すためのきっかけとして――。

目的を持って、あるいはなんとなく、別の土地からこの町に移り住んだ人たちが、仕事や地域活動などそれぞれの形を通して、心地よい新風を吹かせつつも、この地にしっかりと根を張っていく。そんな根っこたちが創る、奥多摩の新たな風景、そしてこの町に根ざすことの意義を見つめていく。



古里地区を一望する大きな窓辺。毎朝の日の出が絶景だという



WHY WE LIVE HERE

CASE1 菅原和利さん

奥多摩と森と人、 その先にある住まいへ



東京・森と市庭が手入れを重ねる奥多摩の社有林の風景

「やってきたことが、全部ここに繋がった気がする」。古里地区を見渡す高台の一角。木の温もりにあふれる新築の我が家で、窓の外に広がる景色を眺めながら、菅原和利さんは語った。遡ること、約20年前。大学在学中から奥多摩に通い、地域の魅力に触れて卒業と同時に移住した。最初に暮らしたのは、家賃5000円の元学生寮。共同風呂とトイレの六畳一間での暮らしが出发点だった。

しかし、その後の道は決して平坦とは言えない。仲間を巻き込んで地域資源を活かした事業を立ち上げるも、手応えが得られなかった。試行錯誤を続けたものの、一度、奥多摩を離れて出身地の神奈川県小田原へ。転職が訪れたのは、不動産会社に勤務して小田原での生活にも馴染み始めた頃。奥多摩の森林資源を活かす新会社「東京・森と市庭」の立ち上げに際し、地域に通じた人材が必要だと菅原さんに声がかかったのだ。

そして、再び奥多摩へ。営業部長として奮闘したものの、当初は売るものも実績も十分でなく、手探りの日々。そんななか見出したのが、保育園・幼稚園向けのオーダーメイドの木製遊具だった。それぞれのニーズに合わせて実績を積み重ね、さらに木育プログラムや家具・内装へも展開。その成果は如実に数字として表れ、2018年前後に黒字化。事業は軌道に乗った。一步一步、時には後退しながらも、階段を上っていった結果、ようやく辿り着いた景色だった。

同時にプライベートにも変化があった。結婚し、子どもが生まれたことで、「奥多摩に住み続けるなら家を持ちたい」という思いが膨らんで、土地探しをスタート。人づてに聞き、地域のガス屋さんを頼り、数年がかりで空き地の情報を辿るなかで出会ったのがこの土地だった。高台で日当たりがよく、生活圏にも近い。条件を満たしていたが、ひとつだけ問題があった。「土地の種目が農地だったんです。家を建てるには、宅地への転用が必要だった。でも、奥多摩では日当たりのいい場所は細で、家は日陰側に建てる。立地的に良い場所は農地であることが多いですね。前例を作るという意味でも農地転用の意義もありましたし、手続きが複雑で転用までは時間がかかりましたが、結果的にこの土地を選んでよかったですね」

設計を託したのは、奥多摩に暮らす建築家の丸谷晴道さん。木製遊具の仕事を通じて関係を築いてきた相手でもあった。施工もまた、これまで仕事で関わってきた職人たちに依頼。使う素材も明確で、奥多摩の木をふんだんに使った。設計も、施工も、材料も、その多くが奥多摩で出会ってきたものでできた家だ。「苦しい時期もありましたけど、ひと区切りというか、奥多摩に家を建てられたのは大きいですね。家族も喜んでくれて。次、何やろうかなって思ってます(笑)」



(上) 森を背に、農地転用で建てた理想の住まい
(右) 現在は、(株)東京・森と市庭の取締役COOを務める菅原さん

自ら関わる多摩産材で組まれた温もりにも満ちる室内空間





地域の困りごとに応じ
役割を広げてきた小菅さん



猿害をきっかけに始まった
柚子収穫を商品化へ展開



湖畔の古民家。協力隊時代に共同生活の拠点として、
今はシェアハウスとしても活用



〈TOKYO OKUTAMA FACTORY〉の大塚めぐみさんと。
奥多摩名産の治助芋事業にも関わる

地方へ移住し、暮らしを立てる足がかりの一つとして、地域おこし協力隊という選択肢がある。小菅直生さんは、奥多摩町で2018年にスタートした地域おこし協力隊の第一期隊員の一人で、任期後もこの町に暮らし続けている。

現在は、奥多摩湖周辺の観光や地域産業を担う「一般財団法人小河内振興財団」に所属し、峰谷川渓流釣場の運営を軸に魚の養殖や人材育成に携わる。担い手不足の現場に入り込み、外部仕入れに頼っていた魚の一部を自ら育てる体制へ移行しながら、コストと供給の改善を实践。その関わり方は、与えられた役割をこなすというより、現場に応じて必要なことに手を伸ばしていく実務に近い。

「最初から『地域のために何かしたい』と思っていたわけじゃないんですけど、外から来て奥多摩、なかでも小河内地区に住まわせてもらっている以上、その恩を返していかなきゃなという感覚はあって。『ここ困ってるんだよね』って話を聞けば『じゃあやりますよ』って手を出してきたんですね。釣り場もお祭りも、誰かがやらないと回らないなら自分がやればいいかな、くらいの感覚で関わってきて、それが結果的に今の仕事につながっている、という感じなんです」

そうした関わりのおかげで生まれたのが、放置柚子の収穫と商品化だ。収穫されないまま残された柚子が獣害の一因となっていたなか、協力隊時代に収穫を手伝ったことをきっかけに、その価値

に気づく。果実を収穫し、仲間が立ち上げた〈TOKYO OKUTAMA FACTORY〉で柚子バターや柚子こしょうへと加工する。未利用資源を地域の価値へと転換するこの実践は、現在の仕事とも地続きにあるものだ。ワークスタイルもまたこの土地に適合。観光が落ち着く冬季は柚子の収穫と加工に充て、まとまった休みもこの時期に取得する一方、繁忙期は釣り場に集中する。季節ごとに仕事を組み替える働き方だ。

さらに、奥多摩湖畔の元民宿を借り受け、シェアハウスとして運用することで、単身者が入りにくい住宅事情に対する入口もつくってきた。現在は繁忙期のスタッフの滞在拠点として機能しつつ、移住希

望者を受け入れる余地も残しているという。「奥多摩に来たときに、これがやりたいっていうのが最初からあったわけでもないんですけど、たぶん単純に居心地がよかったんです、この暮らしも含めて。隣に誰が住んでもわからない都市生活はもう十分やったなっていう感じがあって、せっかくここにいるなら顔の見える関係の中で暮らすほうが自分には合ってるなと思ったし、こういう場所で暮らしている以上は、土地のためになることはやっていきたいなとは思ってます」

地域おこし協力隊はあくまで入口にすぎない。その先の暮らしは、関わり次第でかたちを変える。小菅さんの現在は、その一つの具体例である。

WHY WE LIVE HERE

CASE2 小菅直生さん

地域おこし協力隊から、その先の暮らしへ

木漏れ日が気持ちいい峰谷川渓流釣場。小菅さんがネット予約の入口を作り、新規客の獲得に貢献

奥多摩湖のさらに奥、標高を上げた山あいの集落・峰谷。その一角に、2025年、小さなカフェがひっそりとオープンした。立ち上げたのは、この地に暮らす坂村徳子さん。きっかけは、集落に唯一残っていた商店が約2年半前に閉店したことだった。町指定のごみ袋や日用品すら近くで手に入らない——そうした不便さを実感するなかで、「暮らしを支える場をもう一度つくりたい」と奮起したという。

新築の店舗は、地域の木を使った温もりある空間。朝7時に開店するのは、バス停から山へ向かう登山客にも立ち寄ってもらうためだ。コーヒーやケーキに加え、季節の野菜や山菜の惣菜、缶ビールも並ぶ。さらに乾電池や着火器具、カップ麺などの日用品や食料も扱い、店先には自動販売機も設置。カフェでありながら、かつての商店の役割も引き継いでいる。

坂村さんは八王子出身。約30年前、結婚を機にこの地へ嫁ぎ、山を生業とする家に入った。青梅の医療機関に通勤を続けながら子育てをし、この土地での暮らしを積み重ねてきた。

店名の「清流荘」は、かつて義母・ミエコさんが営んでいた民宿の名にちなむ。店は坂村さんが切り盛りするが、ミエコさんも日々ふらりと訪れ、惣菜の仕込みなどを手伝う。人気の梅干しや梅酒はミエコさんお手製の自慢の品だ。「お店に来て、お客さんとして関わる方が気が楽みだ。実はいちばんのお客さんでもあるんです(笑)」

さらに坂村さんは、集落に残るもう一つの大きな資産にも向き合っている。義父の実家にあたる、築百年の歴史を持つ古民家だ。かつて坂村さんの両親が借り受け別荘として使ってきたが、老朽化が進み、冬場の利用が難しくなっていた。「壊すにも大きな費用がかかるし、それ以上に、この家はもう二度と建てられない。造りも独特で、柱の一本一本や、広い上がり框なんかも、いまの建物にはないものばかりで、だったら活かす方向で考えたいなと思ったんです」

そして、地元建築家・丸谷晴道さんに相談。玄関やキッチン、水回りを改修し、まずはヨガや食事の場として使いながら、将来的には宿泊も可能な拠点へと育てていく構想だという。古いものを打ち捨てずに活かしたい。そう考える坂村さんの視線は、集落を貫く「古道」にも注がれている。

「誰も通らなくなったいまも、地藏や道祖神が点在していて、静かに見守ってくれているんです。前は何かないかと思っていただけ、見方を変えれば魅力があると気づいた。だから、荒れた道を整備し、歩いて楽しめるコースとして再生したくて。何も無いと言ってしまえば、それで終わってしまう。でも、そうやって自分たちで“何も無い”って言い続けていたら、本当に人が来なくなって、なくなっていってしまうんです。ちゃんと伝えていかないといけないって」

派手な観光地ではなく、時間をかけて味わう土地に。この場所を「極楽浄土みたいになりたい」と笑う坂村さん。彼岸花を植え、歩き、静かに過ごせる場所へ。その歩みは、すでに始まっている。



ミエコさん仕込みの梅干しと梅酒

同じ造りをした、築100年ほどの3棟が山の中腹に建つ。
そのうちの1棟が義祖父母の家だった



二人の良い嫁姑関係。清流荘の空間は、
二人が醸す和やかな雰囲気でも満ちている



改修した古民家のキッチンと土間。その奥に風呂、トイレと続く。
施工は(株)小山工務店が手掛けた



かつて人々が行き来した
旧道。日々の合間に散歩して
調査しているという

WHY WE LIVE HERE

CASE3 坂村徳子さん

継ぐ、活かす、明日をつくる

カフェ清流荘 峰谷ショップ
住所: 奥多摩町留浦1390(峰谷バス停終点)
営業時間: 7時~17時※変更あり
不定休
Instagram: @minedanishop_seiryuso



ボランティアスタッフたち。町内外さまざまな人が集う



WHY WE LIVE HERE

CASE4 佐藤勉さん

100円カレーがつなぐ、人の縁と地域の居場所



JR鳩ノ巣駅の目の前。月に一度だけ現れる小さな食堂がある。100円で振る舞われるカレーを自当てに訪れるのは、近隣の高齢者、昼休み中の事業者、年若い移住者など、年齢性別もさまざまな人たち。「ふれあい食堂」と名付けられたその場を切り盛りするのが、60歳でこの地に移り住んだ佐藤勉さんだ。「定年になって、この先どうするか考えたときに、都会に居続けるよりも、こっちで暮らすほうがいいと思ったんです」

阿佐ヶ谷で居酒屋を営み、千葉で農業にも携わってきた佐藤さんは、そう振り返る。「ただ、完全に田舎に入り込んでしまうと外に出づらくなる。でもここなら中央線一本で都心に出られる。これまでのつながりも切れないし、新しい関係もつくれる。そのバランスがちょうどよかったんです」

転機となったのは、「奥多摩 都民の森」での林業体験講座だった。そこで出会った仲間と鳩ノ巣の民家を借り、林業やわさびづくり、畑仕

事を共同で始める。二拠点生活を経て2012年に移住。その後はわさび生産に力を入れていたが、三年ほど前、頸椎の手術や足のけがで体が思うように動かなくなった。「それまでやってきたことが難しくなってね。それで、自分にできることは何だろうと考えたときに、料理ならできるとして」。そして、町の長寿ふれあい食堂推進事業を活用し、食堂を立ち上げた。緑のあった鳩ノ巣駅前の飲食店「さんらく」に声をかけ、場所を借りることにしたのは、「人が集まりやすい場所でもよかった」からだ。

看板メニューのカレーは、かつて食肉関連の仕事に就いていた経験を活かしたもの。良質な肉を仕入れ、手間を惜しまず仕込んだカレーは絶品だと評判だ。「安いから来るっていうのもあるけど、それだけじゃなくて、ここで顔を合わせることが大事。おかげさまで回を重ねるごとに来場者が増えていて、ご飯が足りなくなることもあります」

食堂を支えるのは、多様なボランティアの存在だ。「地域で活動していた人もいれば、キャンプ場に来て知り合った人もいる。コロナの頃に通うようになって関わってくれるようになったりね。阿佐ヶ谷のときの知り合いが、今も来てくれていて、昔のつながりとこっちでの縁が混ざっている感じがする。自分は全部やるタイプじゃないから、やる人を見つけてお願いしているんです」

店先では、地域の人たちによるクラフト市も始まった。手づくりの雑貨が並び、食堂は食事の場にとどまらない広がりを見せている。「やりがいというより、生きがいですね。今後について尋ねると、「継続です」と即答する佐藤さん。「これを続けていくこと。それがいちばん大事だと思っている」。

熟年での移住とはすなわち、静かな余生の選択とは限らない。これまでの経験を糧に、関係や場を育てていく。その営みが、ここ奥多摩で確かに形になっている。



居酒屋経営の経験から「人が集う場づくり」にも長けている佐藤勉さん

奥多摩でわさびの栽培から商品開発、販売までを一貫して手がける「TOKYO WASABI」。兄・仁さんと弟・竜也さんによる「わさびブラザーズ」に、パートナーの大志田百さんを加えたりして、「奥多摩のわさびを世界へ」というコンセプトのもと活動を展開している。

もともとは、仁さんが仲間たちとキャニオニングでゲストを楽しませる会社をつくろうと、奥多摩へやってきたことが始まりだったという。「キャニオニングがきっかけで奥多摩の存在を知って、その後、奥多摩でわさびと出会うことになったんです。以前、海外にステイした時に日本人であることを強く意識する機会があって、そんな経験も手伝ってか「わさびって日本の代表と言っているのか」という意識につながっていったんです」

キャニオニングの仕事は夏季が中心だったことから、冬の生業を模索するなかで、わさびに着目。わさび田を訪ね、その魅力を味わう体験ツアーをスタートさせた。

そんなタイミングで、弟・竜也さん、そして程なくしてニュージーランドで知り合ったという百さんが合流。竜也さんは第一次産業の経験が豊富、百さんは前職でフード関連の商品開発や

ウェブ制作経験もあったという、それぞれの強みを活かしながら活動が広がっていく。休耕状態だったわさび田を修復し、本格的な栽培に取り組むとともに、奥多摩駅前でのフードトラック「わさび食堂」の運営や各地イベントへの出店も展開。「奥多摩わさびドッグ」や「WASABI COFFEE」といったメニューも人気を集めている。

「噂を聞きつけて国内外のシェフやレストランから問い合わせが来るようにもなりましたが、わさびの栽培はつくづく難しいと感じていて、わさび田の構築から日照、気温、水量の加減など、立派に育てるにはまだまだ謎の部分も多くて苦労は絶えません」。

ただ、技術の伝承や生産者の高齢化などもあって、せっかく奥多摩の伝統であるわさびの生産量が減っている状況をなんとか変えていきたいというモチベーションはとても高いんですよ。奥多摩のわさびを世界的なブランドにしていきたいという気持ちで僕ら、毎日、張り切ってます」

わさびの魅力に取りつかれ、いつしか奥多摩に根を下ろした3人。その挑戦は、地域の風景とともに、これからも更新されていく。



辛さに加え甘味、旨みも感じられる奥多摩のわさび



フードトラックでは、香り高いわさび丼を味わえる



崩れた石垣を修復し、水の流れを整えていく

WHY WE LIVE HERE

CASE5 角井仁さん・竜也さん・大志田百さん (TOKYO WASABI)

自ら育てたわさびを抱え、世界を目指す。



わさびと共に生きる3人。視野の先には世界が!

毎日のようにわさび田のある山で作業が続く

JR鳩ノ巣駅からほど近く。手の込んだカフェメニューに、窓の外に広がる緑の眺望。ギャラリーとしての機能も兼ね備え、店内は季節ごとに表情を変える。そんな心地よい空間に惹かれ、観光客も地元の人も分け隔てなく訪れる、人気喫茶「山鳩」。現在営むのが、2代目の原島秀伍さんと秋恵さん夫妻だ。

奥多摩に生まれ育った秀伍さんは、高校時代から町外で暮らし、結婚後も神奈川県藤沢市で生活していた。いずれは戻るつもりでいたというが、「もし戻ってくるなら三十代半ばまでじゃないと地域に馴染めないぞ、と父から言われていて」。家業を継ぐ決心と子どもの成長のタイミングが重なり、Uターンしたのが2020年。戻ってみると、感覚はすぐに身体に馴染んだ。「たまに都心に行くと、早く帰りたいなって思うんです。奥多摩にいと落ち着くって」

一方、群馬出身の秋恵さんにとって、奥多摩は外から入った土地だった。最初は戸惑いもあったが、仕事と育児に忙しい日々の中ですっかり地域に溶け込んだ。「ここで働いているうちに、知り合いがどんどん増えていきました。役場に行っても、みんな知っている人ばかり。大きなまちではありえない距離感だけど、安心感がありますよね」

現在、秋恵さんは奥多摩町まちづくり委員やPTA役員としても地域に関わる。「大きなことはできないけど、人の話を聞いてつないでいくことならできかなと思って」。人口の少なさは、そのまま一人ひとりの存在の近さであり、影響力の大きさでもある。役割が自然と回ってくるこの

土地で、自分なりの関わり方を見つけている。

子育てにおいても、この土地ならではの魅力があったという。忙しいときには周囲が手を貸し、学校では一人ひとりに目が届く。

「私にとっては初めての飲食業で、子育てもしながら本当に手探りでした。でも、周りの人に助けてもらえたおかげで、なんとかやってこれた。スキー教室や探究学習など、町の体験プログラムが充実しているのもありがたくて、子どもたちは積極的に参加させてもらっています」

一方で秀伍さんは、地域の消防団や祭りにも関わっている。「大変なこともあるけど、やっぱり誰かがやらないといけないことなので。中学生の頃に経験した獅子舞を、二十年以上の時を経て再び担うことになった。「体力的にはきつけど、小さい頃から観てきたので、音や動きが身体に残っていて、その記憶を辿りながらやっています」

山鳩もまた、先代から受け継いだ営みを土台に、少しずつアップデート。雑貨の充実やオリジナル商品の展開もその一つだ。なかでも人気なのが、間伐材を使った山鳩コースター。近隣から材を仕入れて秀伍さん自身が加工し、店で販売している。小さな試みだが、地域資源を循環させる確かな手応えがあるという。

Uターンとは、単に元に戻ることではない。土地に蓄積された時間と、自分たちのこれまでを重ね合わせ、新たな関係を編み直していくことだ。山鳩という場を軸に、原島夫妻はその営みをこれからも続けていく。



毎年8月の第三日曜日に開催される棚澤の獅子舞。右が秀伍さん



服飾系の仕事をしていたという二人。いつも着こなしが光る

WHY WE LIVE HERE

CASE6 原島秀伍さん・秋恵さん

2代目&Uターン夫婦、地域に根ざす

喫茶山鳩

住所：奥多摩町棚澤380
Tel: 0428-85-2158
営業時間：10時～17時
月曜定休（祝日の場合は翌日）、第3火曜休
Instagram: @yamabato_tokyo



シフォンケーキ、ハヤシライスなど人気メニューが盛りだくさん



鳩ノ巣在住のアーティスト、Koumoriyaの伊藤弘二さんによるオリジナルグッズも

WHY WE LIVE HERE

CASE7 駒宮献さん・恵さんファミリー

奥多摩でマルチタスクの日々を楽しむ



「HealthySmoothie」(青梅市御岳332-11)は平日11時30分～17時、土日祝は～17時30分まで営業。アサイーボウル、オーガニックコーヒーなども



献さんが仕立てた子供用の化粧台



まだまだやりたいことが満載だと話す、献さん。



以前は陶芸家が利用していたというログハウスの

長女の杏ちゃんは近所の川や山で遊ぶのが大好き



古里地区から青梅街道を奥多摩方面へ進み、多摩川に架かる寸庭橋の先へ。寸庭集落は山から流れ出る豊かな清流に恵まれた居心地のいいエリアだ。駒宮さんファミリーは4年ほど前、この地で理想の家を見つけ、購入した。「その頃は青梅で暮らしていたんですが、もっと自然に囲まれた場所に住みたいと思っていて。それで何気なく奥多摩周辺で家を探そうとバイクで走っていたらこのログハウスを見つけ、一目で気に入ってしまったんです。隣に住んでいる方が大家さんを紹介してくれて、偶然の出会いからお目当ての家を購入することができました」

これまでラフティングやスノーボードのガイドなど主にアウトドア業界で多様な経験をしてきた献さん。会社という枠に縛られるのが嫌いで、今では個人事業主というスタイルで様々な仕事を手掛けている。「冬は海外のツアー会社の仕事で、外国から日本の雪山にやって来たゲストをガイドする。それ以外のシーズンは近所のキャンプ場運営や、外国人ゲストに奥多摩を紹介するツアーのガイドなど。そのほか、知人に頼まれて北海道のロッジに手伝いにいたり、奥多摩の古民家再生事業に関わったり、民泊を運営したり、竹林整備や水道工事、ドッグラン造りを頼まれたり。い

ろいろな仕事をやるのが自分の性に合っているのかもしれない」
妻の恵さんは念願だったスムージー専門店「Healthy Smoothie」をJR御岳駅近くにオープン。代表として忙しく働く毎日だ。「子どもも小さいし便利な青梅での暮らしが気に入ってんですけど、引っ越してみたら環境もいいし、居心地いいなって。暮らしてみたら不便さとかあんまり感じないですし、庭でBBQできたり、目の前の川で遊んだりできるのも奥多摩ならではだと思ってます」

将来のことをぼんやり考えながらも、日々の充実を重視していると話す献さん。奥多摩での自

由な暮らしを自ら、こう評した。「竹林整備にしてもキャンプ場運営にしても結局、仲間が必要なんですけど、いろいろな特技を持った人が近くに住んでいるのも奥多摩の魅力です。自分の距離も近くて遠いというかほど良い感じで自分にはちょうどいい。それに、東京から電車で日帰りできるこのエリアでこれだけの自然があるっていう点も奥多摩の魅力です。自分としては民泊、キャンプ場、近所のお手伝いとかいろいろなことを楽しみながらこなして行って、奥多摩への小さな貢献が結果として積み重なっていけばいいなと考えています」

— お二人とも、奥多摩には外から来られて
います。

あいだ 私は沖縄県の宮古島出身です。もともとは都内に住んでいたんですが、子どものためにも環境を変えたほうがいいんじゃないかと思って、奥多摩に来ました。ただ当時は、「ここでどうやって暮らしていくんだろう」という不安のほうが大きかったですね。

ちゃま 私は北海道の札幌です。仕事も仲間も活動もあって、毎日すごく充実していました。でも定年を迎えるにあたって、第2の人生をどこでどう生きるか考えたんです。北海道の雪は、年を重ねるとやっぱりきついですしね。東京には以前住んでいたこともあって馴染みもありましたし、自然に囲まれながら都心にも出やすい奥多摩は、とても魅力的でした。縁があって住むことになって、もう15年になります。

— 実際に来てみて、どう
でしたか。

あいだ 私は最初、本当に不安が八割くらいでした。でも移住してすぐに立ち上げた自主保育グループ「ぐーちょきばー」や「障害のある子を持つ親の会」(※1)の仲間との活動をを通して、少しずつこの町に馴染んでいった感じがします。住んでいる梅沢自治会も移住者にやさしい地域で、2015年には梅沢の女性たちの会もできて。コンサートやジャム作り、たくあん作りなんかもやったりして。今は「うめじょ会(うめ助会)」として、老人会も兼ねた地域の活動につながっています。

ちゃま 会として立ち上げる前から、月に1回くらい女性たちで集まっていたんですよ。持ち寄りの飲み会みたいな感じで、地域のこととか困っていることとか、「梅沢でこんなことができたらいいよね」と話したり。女性同士だと話がどんどん広がるし、人の目とかしづらみとかあまり気にしないからアイデアも出やすいんですよ。

あいだ 地域のことって、まだまだ男性中心で決まってくる場面が多い。でも、実際に暮らしを支えて、子育てをして、日々の小さな変化に気づいているのは女性だったりする。そういう生活者としての視点は、すごく大きいと思っています。

ちゃま だから私は、あいださんは議員になったほうがいって本気で言ったんです。組合活動の中で選挙もいろいろ見てきたので、どうい人が議会に必要かっていう感覚は自分なりにあって。生活者目線の女性がいることには、やっぱり意味がある。うめじょ会でもそんな話をしましたよね。

あいだ そうですね。和枝さんにそう言ってもらえたことは心強かった。実際、議員になる覚悟ができた背景には、それまで関わってきた多くの方の後押しもありました。立候補する10年くらい前から、選挙のたびに色々声を

かけていただきましたし、他の自治体に尊敬する女性議員がいて、その方の話を聞くなかで地方自治に興味を持つようにもなっていて、とはいえ、選挙は未経験ですし、地盤もない移住者、しかも女性の自分がこの地域で挑戦するのは、やっぱり大きな決断でした。ちゃま そこから「まちづくりをしていこう」という流れにもなっていて。議会と町と住民がどうつながって、どう一緒にまちをつくっていくか。だんだん、そんな話にも広がって、それが「新しい奥多摩をつくる会」(※2)にもつながっていったんだと思います。

— 声の大きな“よそ者”として、生きづらさや

— ちゃまさんは、もともと「変えていく」活動
をされていたんですよね。

ちゃま 私はもともと看護師で、患者さん200人を夜3人くらいで見ていた時期があったんです。「これじゃ、いい看護はできない」と思ったところから動き始めて、その後は組合運動にも深く関わるようになりました。何が足りなくて、何を活かして、どうしたら良くなるのか。ずっとそのことを考えてきたんです。だから奥多摩での活動も、その延長線上にあります。最近では「嫌だから出ていく」じゃなくて、「自分たちで変えよう」と思って来ている人が増えている気がしますね。奥多摩って、

けて、最後にエールをお願いします。

あいだ 私が来た30年前に比べると、今は素敵な移住の先輩たちも増えて、地元と自然に混ざり合いながら暮らしています。いろんな場を通して、たくさんの方と関わってほしい。この町のいちばんの資源は「人」だと思うので、つながりができると暮らしもぐっと広がると思います。

ちゃま 誇りが持てて、自慢もできて、希望もある町ですよ。伸びしろがあるからこそ、いろんな人に、いろんなやり方で関わってほしいなと思います。

あいだ 自分のやりたいことを、あまり躊躇しないでやってみてほしいです。新しいことを始めると最初は「ちょっと変わってるね」と言われることもあったけど、私もそうだし、和枝さんもそうだし、そんな先輩はほかにもたくさんいるので。大丈夫です。

ちゃま でも私、そういう人たちのこと、変わってるというより「面白い人」だと思ってるんですよ。むしろ、町を前に進める人たちがなってる。

あいだ それなら、いいですね(笑)。

※1障害のある子を持つ親の会
障がいのある子の親同士がつながるため、小学校の保護者を中心に立ち上げた親の会に参加。その後、NPO 法人「タンポポの会」の認証を受け、奥多摩町障害者地域活動支援センター「かもんみる」の運営にも繋がった。現在の親の会は「凸凹たんぼの会」として、当事者や家族のみならず地域の方々も交えて啓発活動を行っている。

※2新しい奥多摩をつくる会
ちゃまさんが事務局長を務める、奥多摩のまちづくり活動を志す任意団体。通称あたおく。町民を中心に大学生や観光事業者など関係人口を含め、現在約100人のメンバーがいる。

自分たちで作り出している場所ですよ。

あいだ ないものは作ろうって発想になれる町なんですよ。自主保育グループも親の会も、必要があって生まれたもので、そこには必ず一緒に動く仲間がいました。親の会の活動を通して、障害のある人を取り巻く状況は変えていかなきゃいけないと痛感しましたし、町とのやりとりを重ねる中で、「無」だったものが少しずつ「有」になっていった。その先に今の障害者地域活動支援センターがあります。これからも、障害のある方を含めて、地域のマイノリティの生きづらさを受け止められる議員でいたい。その思いを育ててくれたのが奥多摩だと思っています。

あいだ そのぶん、気楽さもあるとは思いますが、地元の人たちには積み重ねてきた歴史があって、奥多摩の良さを肌で知っている。その部分はちゃんと尊重しながら、お互いに刺激し合える関係でいられたらいいなと思います。

ちゃま 地元の人はいにくいこともあるけど、私たちは「必要だよ」と思ったことを、比較的まっすぐ言えたりもする。その違いも、悪いことじゃないと思うんです。

— 移住者や、移住を考えている人たちに向

Girls' Talk Revolution



撮影場所：奥多摩AUBA(氷川197-5)

よそ者で、女性で、生活者だから。 ～私たちのまちづくり雑談～

NPO 法人「タンポポの会」元代表であり、町議員のあいだえみこさんと、
地域の交流拠点である「奥多摩 AUBA」の運営にも関わる濱野和枝さん(通称：ちゃま)。
奥多摩町梅沢集落に根を張りながら、移住者・女性という立場からの違和感を起点に、
地域を動かしてきた二人の対話。

やりづらさを感じることはありませんか？

ちゃま 地元の人は、どこの誰で、どこにつながっているかがわかる。でも私たちは、そうじゃない。しがらみがないから動ける、っていうものもありますよ。

あいだ そのぶん、気楽さもあるとは思いますが、地元の人たちには積み重ねてきた歴史があって、奥多摩の良さを肌で知っている。その部分はちゃんと尊重しながら、お互いに刺激し合える関係でいられたらいいなと思います。

ちゃま 地元の人はいにくいこともあるけど、私たちは「必要だよ」と思ったことを、比較的まっすぐ言えたりもする。その違いも、悪いことじゃないと思うんです。

A HISTORY OF ARRIVAL

この地の風景をつくった かつての移住者たち

コロナ禍をひとつの契機に、奥多摩へも移住の動きが広がったことは記憶に新しい。移住者という言葉も定着して久しいが、長い歴史をたどれば外から来た人びとが根を下ろし、風景や文化を重ねながら形作られてきた土地でもある。現在、「地の人」と呼ばれる人びともまた、その連なりのなかにいるのだ。

2

中世時代、士族たちの流入

遺物の時代を過ぎると、奥多摩の歴史資料はしばらく空白が続く。次に人の輪郭が少し具体的になるのが中世だ。谷間の平地にはこの頃すでに人が住んでいたはずだとされ、その上に、埼玉や山梨から新たな一族が流れ込んできたという。国司に従っていた者たち、武田氏滅亡後に流れた士族、秩父や熊谷方面から山を越えて来た武士たちなど…。家族や家来を含むまとまりをもった集団として、流入したと思われる。入ってきた側のほうが知識や統率力を持ち、相対的に強い立場にあったのではないかと考えられるが、そのうちに、先住の人々と混ざりながら血縁・地縁を結び、村の原型を形づくっていった。



4

ダム建設、石灰採石 労働のための移住

近代から昭和にかけての流入は、それ以前とは性格が異なる。大規模な事業により人と仕事が同時に流れ込んできた時代である。その象徴が小河内ダムの建設であり、昭和13年に付け替え道路工事が始まると、工事関係者とともに、その暮らしを支える商いの人びとも奥多摩へ移り住んだ。たとえば、氷川地区で2018年まで営まれていた「寿々喜家」。新潟県出身で惣菜の引き売りをしていた鈴木家が、ダム建設による活性化を見込み「奥多摩で商いをしよう」と移住し、食堂を開店。ほか、今に続く飲食店や商店でもこのような背景を持つ例がある。一方、日原地区では石灰採石を担う奥多摩工業の事業が拡大し、もうひとつの流入を生んだ。戦後に本格化したこの産業は、多くの労働者とその家族を呼び込み、社宅や交通網の整備とともに地域のかたちを変えていった。



1

縄文時代から流入あり

奥多摩に人が現れるのは、まず縄文の時代である。町内では縄文遺跡が確認されているが、彼らは現在の意味での「定住者」ではなかった。狩猟採集を生業に移動する人々がこの地を訪れていたのであり、恐らくは暮らしの拠点を固定したわけではない。弥生期になると、平地では稲作文化が広がる一方、平地のない奥多摩では弥生土器などの痕跡が乏しく、人の移動はあまり見られなかったようである。人の定住の様子が見えてくるのは古墳期以降で、焼畑農業や狩猟を営む人々の存在が、土師器や須恵器の出土によって裏づけられている。出土地点は、棚沢、氷川、小丹波、白丸など町内各所に及び、字の入った古い須恵器も確認されている。



3

地を拓くためにやってきた開発者

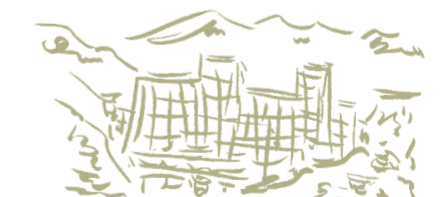
奥多摩において「外から来た人」が単なる来訪者ではなく、土地の骨格そのものをつくった例として象徴的な存在が、原島丹二郎友一・丹三郎友連の兄弟である。明応年間(1492年～)、武蔵国の忍原原嶋村(現在の埼玉県熊谷周辺)から、一族郎党を伴って奥多摩へ。それは偶然の移住ではなく、土地を切り開き、支配し、広げていく意志を持った移動であり、兄の丹二郎は日原を、弟の丹三郎は丹三郎(自らの名前からとった地名をつけた)や小丹波を開いたと言われている。なお、彼らが奥多摩に辿り着いたルートは、現在のように川沿いではなく、秩父側から尾根や峠を越えて入る山越えの導線であったはずだ。そのため、日原や大丹波などが最初の到達点になり、開発が進められた可能性が語られている。なお、現在も奥多摩町でもっとも多い氏族である原島姓は、この一族がルーツとなっている。



5

姓名から見える移住のかたち

奥多摩に多い姓の多くは、前述した原島姓然り、移住と結びついている場合がある。甲州武田領と接し、小河内衆の頭目として国境守備の重要な使命を担った家柄の杉田氏の始祖は、越後(新潟)から入郷したと伝えられている。小峰姓は、小田原城主につながる大森氏の一族が武田侵攻を受け、山梨側から大菩薩を越えて氷川へ落ち着いた系譜と伝わる。さらに、源氏の流れを引くとされる田草川姓は、奥多摩に入ったのち、原島を名乗るようになった例もある。寸庭地区では、堀口の一族が移住に際して「新島」と名を改めたという伝承も。こうした姓名の変化や分布は、この地が多様な人口流入の重なりによって形づくられてきたことを示している。



残置物を清掃プロ集団のオビトチームが
手際よく片付ける



ありのまま、いのまま、おもいのまま 町に眠る空き家を動かす 「のまま」プロジェクト

Empty Homes,
New Stories



家の思い出を記録する
「お守りBOOK」の制作相談も



寸庭集落に行む古民家物件。
広々とした敷地で家族で暮らしたいという、
借り主のニーズに叶った良物件だ



問い合わせ
空き家相談窓口(のまま)
(担当:丸谷)
TEL 090-2420-0127
MAIL minamori@gradegion.co.jp

長閑な寸庭集落の一角に建つ、立派な古民家。その縁側で、冬晴れのある日、ふたりの男性が言葉を交わしていた。家の持ち主である小山浩さんと、新たな住まい手となった高井淳也さんである。

「全部がちょうどよく重なったんです。本当にタイミングがよかった」。そう振り返る小山さんは、この家の扱いに悩んでいた。この家でひとり暮らしをしていた実母の施設入所が決まり、空き家になることは避けられない。寄付や売却も考えたが、決断には至らなかった。一方の高井さんファミリーは、町営住宅に住んでいたものの、諸事情で一度町外へ。その後も奥多摩での暮らしを望み続けていたが、物件は見つからなかった。「町営住宅への再入居は断られてしまい、広い家を探していたんですが、全然なくて。あっても状態が悪かったりして」。

この両者をつないでのが、2025年に始まった空き家を「動かす」プロジェクト(のまま)である。担うのは、地域と専門性を横断するメンバーたちだ。窓口となるのは、奥多摩に拠点を置くグラデーション合同会社の代表であり、建築家の丸谷晴道さん。所有者探索や売買、移住希望者とのマッチングなど不動産領域を担うのは、奥多摩町に隣接する山梨県丹波山村で実

績を重ねてきた梅鉢不動産の梅原颯夫さん。さらに、清掃を通じて地域価値を高めてきた株式会社オビト代表の大井朋幸さん、家に宿る記憶を記録として残す「お守りBOOK」を手がける鈴木さとみさんが加わる。

空き家問題は、所有者探索、相続、片付け、不動産取引といった複数の課題が絡み合う。(のまま)はその分断をつなぎ、「ありのまま・いのまま・おもいのまま」に、空き家を次の段階へと動かしていく。とりわけ重要なのは、「現状のまま」でも動かせるという設計だ。残置物や老朽化によって止まっていた物件も、整理や清掃、場合によってはそのままの引き取りまで含めて対応することで、流通の入口に乗せることができる。

今回の小山邸も、その仕組みの中で動いた一例だった。奥多摩町まちづくり推進事業として制作したパンフレットを閲覧板で全戸配布したことをきっかけに相談が入り、顔の見える関係性の中でマッチングが成立した。丸谷さんは、空き家を通してこの町の未来を見つめている。「パンフレットは想像以上の反響があり、潜在ニーズの手応えを感じることができた。奥多摩に住みたい人も、家を次のステップにつなげたい人もまだまだいるはず。空き家を資産として見つめ直し、地域の未来につなげていきたい」



縁側で話す高井さん(左)と小山さん(右)

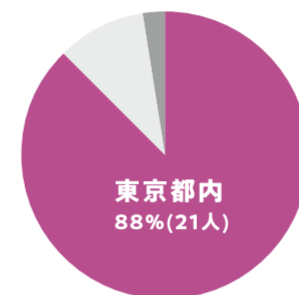
移住 BEFORE&AFTER QOL調査

移住の理由は？移住後の暮らしはどう変わった？

移住者25人にアンケートを実施。奥多摩での暮らしの変化と満足度のリアルに迫る。

1 移住前に住んでいた地域

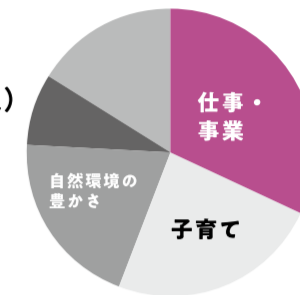
- 1 東京都内……88%(21人)
- 2 長野県……10%(3人)
- 3 京都府……2.5%(1人)



回答者の約9割が都内での移住。都市部での生活を前提としていた人たちが、主に23区や多摩地域から奥多摩へと拠点を移した。

2 移住した理由

- 1 仕事・事業……32%(8人)
- 2 子育て……24%(6人)
- 3 自然環境の豊かさ……8%(5人)
- 4 スローライフや自給自足……8%(2人)
- 5 その他……4人



最も多かったのは仕事や事業をきっかけとした移住。自営やフリーランスの移住者も多いのも理由だろう。子育てや自然環境への関心も大きい。

3 移住して増えたもの

- 1 自然に触れる時間
- 2 人とのつながり
- 3 趣味の時間
- 4 家族との時間
- 5 仕事の満足度
- 6 通勤時間

最も多く挙げられたのは「自然に触れる時間」。続いて「人とのつながり」「趣味や余暇の時間」と、日々の実感に関わる要素が並ぶ。家族と過ごす時間や自分のための時間が増えたとする声も多い。効率ではなく、体験や関係性に時間を使う暮らしへと確実に変化している。一方で、灯油代、ガソリン代の負担が増えたという声も。冬の寒さや移動の多さに起因している。

4 移住して減ったもの

- 1 家賃
- 2 通勤時間
- 3 収入
- 4 食費
- 5 身体を動かす時間
- 6 特になし

「通勤時間」「家賃」が減少したほか、「ストレス」や「人の多さ」といった要素も挙げられた。「通勤時間」の減少は、移住後の起業や転職に伴う回答だろう。「収入」や「利便性」「生活におけるあらゆる選択肢」が減ったとする声もあり、都市的な豊かさとのトレードオフも見られる。ただ、利便性の低下は日々の選択や行動に影響を及ぼしつつも必ずしもネガティブではなく、単純なQOLの指標では測りきれない。

5 移住して大変だと感じること

- 冬の寒さ・移動の大変さ
- 車がないと生活が不便
- 庭の手入れ 雑草対策

医療機関の少なさや公共交通の脆弱さ、通学や買い物の距離など、不便は多岐にわたる。電車の本数の少なさや天候による運行の不安定さ、終電の早さは移動の制約となり、自家用車での移動も含め、「時間と費用がかさむ」という声は多い。子育てにおいては、「子育ては女性が担うもの」という意識が根強いと感じる場面もあるという。「2人目を考えたいが、預け先の選択肢が限られていて踏み切れない」といった、頼れる実家が近くにない移住者ならではの声も聞かれた。また、「噂話が多く、地域との距離感に気を遣う」といった声もあり、都市生活に比べ、人間関係への配慮が求められる場面も少なくない。

6 移住して一番驚いたこと

- 星・空・静けさのレベル
- 野生動物や虫
- 近所の助け合い文化

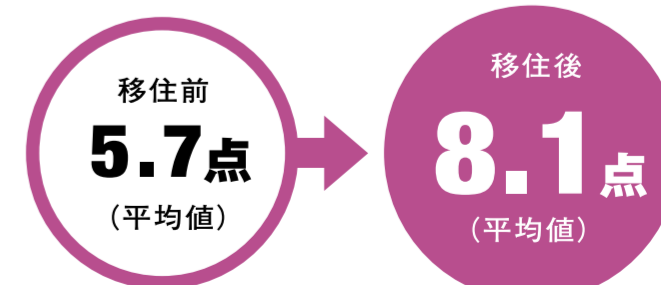
挙げた内容は、自然環境から人間関係、生活インフラまで多岐にわたる。「ここが東京なのかと思うほど山が近い」「野生動物が日常にいる」といった自然の豊かさや驚きがある一方で、「花粉が煙のように舞う」「虫の多さや大きさが想像以上」「山間なので冬は日当たりが悪く家が冷える」など、その影響の大きさを実感する声も挙げられた。「地域のつながりの深さ」に驚きと安心感を覚える声も多いが、「距離感の近さ」に戸惑う声も。また、「60代が若手と言われる」といった人口構成や、「スーパーが遠く日常生活にも移動を伴う」といった生活動線の違いも、暮らしの前提の違いとして実感されている。

7 移住して良かったと思う瞬間

「朝、鳥の声で目覚める」「窓から山を眺める」「庭で満天の星空を見る」「音のない時間に身を置く」など、自然に囲まれた日常に価値を感じる声が多かった。「平日の夕方に子どもと外で過ごせる」「豆から挽いたコーヒーを飲みながら季節の移りを感じる」など、時間の使い方の充足感も見られた。また、「人が多すぎず適度な距離感がある」「困ったときに助けてもらえる」という関係性の心地よさや、「限られた環境の中で工夫する楽しさ」「自由に庭をつくれる」など暮らしの手応えも。「多様な人と話す中で新しい物の見方を知る」「日々の小さな変化に気づくようになった」など、感性や価値観の変化もあった。

- 家族と過ごす時間が増えたとき
- 通勤ストレスがなくなったとき

8 生活の満足度(10点満点)



生活満足度については、回答者が総じて移住後に向上したと評価していた。環境や働き方の変化が、暮らしの質の向上につながっているのだろう。

LIFE, SUPPORTED HERE

定住支援の現在地

東京都の自治体のなかでもいち早くスタートした「空き家バンク」、15年定住で住宅等を無償譲与する「若者定住応援住宅」など、奥多摩町はかねてより先駆的な定住支援に力を入れてきた。現在も、移住希望者の段階や志向に応じて複数の選択肢を備え、とりわけ近年は分譲地の整備に力を注ぎ、定住につながる受け皿を広げている。子育て定住推進課の杉山啓樹さんは、「問い合わせの多くは、“まず奥多摩町に住んでみたい”という段階の方」と話す。いきなり家を買うのではなく、賃貸で生活を試したい——そんなニーズに応える入口が町営若者住宅だ。都心に比べて安価で借りられ、暮らしを体験するのに最適だという。一方で相談の幅は広く、高齢者からの問い合わせも。その場合には年齢制限のない空き家バンクを案内するなど、状況に応じた対応が取られている。なお、空き家バンクの物件は更新直後に申し込みが入るなど、関心の高さがうかがえるという。そしてこうした流れを支えるのが、「奥多摩に暮らしたい人登録バンク」だ。一度登録をすれば、住まい探しの情報を継続的に受け取ることができる。



奥多摩町
子育て定住推進課
若者定住推進係

杉山啓樹さん

※インタビューは
2026年2月に実施

1 奥多摩町移住・定住応援補助金

次代を担う若者世代の移住・定住を応援するため、奥多摩町に住宅を購入などされた方に補助金の交付を行っている。

<p>年齢条件</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 45歳以下の夫婦 ② 高校生以下の子どもがいる世帯 ③ 35歳以下の単身者 <p>※補助金の限度額に達しない場合は、再度補助金等を申請することができる。</p>	<p>給付の条件と補助額について</p> <p>住宅の新築購入・リフォームの場合 事業費が10万円以上で事業費の1/2以内 → 最大現金 200万円</p> <p>さらに</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 町内業者の利用で10万円の奥多摩町商業協同組合商品券を上乗せ ② 地場木材の活用で10万円の奥多摩町商業協同組合商品券を上乗せ <p>→ 最大現金 200万円</p>
---	---

2 利子補給

奥多摩町に定住を目的とした住宅を購入などされた方に資金借入に対する利子補給を行っている。

<p>年齢条件</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 45歳以下の夫婦 ② 高校生以下の子どもがいる世帯 ③ 35歳以下の単身者 	<p>給付の条件と補助額について</p> <p>融資金額が400万円以上+償還期間が10年以上 借入利率の1/2 年額(利子補給限度額)30万円 さらに町内金融機関の利用で33万円 給付期間36カ月 利子補給(33万円×3年) → 最大 99万円</p>
--	---

3 町営若者住宅

奥多摩は坂が多く、造成を含めた住宅建設にはどうしてもコストがかかる土地である。そうした条件のなかで、若い世代が暮らしを始めやすくするために、家賃を抑えた町営住宅が整備されている。ここは、生活の拠点をつくるための入口のような住まいである。この場所で暮らしを整え、その先で自らの住まいを持ち、町に根を下ろしていく——そうした流れの起点となることが想定されている。



※過去に建設した町営若者住宅

使用料(家賃)の相場 20000円/月~33000円/月
床面積 約54㎡~76㎡

年齢条件

- ① 40歳以下の夫婦
- ② 50歳以下の者で中学生以下の子どもがいる世帯

4 いなか暮らし支援住宅・若者定住応援住宅

町では、過疎化にともなう少子高齢化対策の一環として、空き家を活用した譲与型住宅制度を設けている。対象は、町外からの転入者、または町内で借家暮らしをしている人で、住宅を自らの住まいとして15年間定住した場合、住宅等が譲与される仕組みである。なお、土地・建物はいずれも現状での引き渡しとなり、リフォーム費用は申込者の負担となる。



いなか暮らし支援住宅 年齢条件

- ① 45歳以下の夫婦 ② 高校生以下の子どもがいる世帯

若者定住応援住宅 年齢条件

- ① 40歳以下の夫婦 ② 中学生以下の子どもがいる世帯

Voice 利用者の声

白井康介さん
(2025年に東京都柏江市から移住)

自然の中でのびのび子育て

子どもが生まれたことをきっかけに、自然豊かな環境でのびのびと子育てをしたいと考え、移住を決めました。支援制度が充実している点も後押しになりました。現在は町営若者住宅を利用していますが、内装もきれいで広さも十分。家賃面も含めて満足しており、暮らしの不便さも想像していたほど感じていません。安心して新生活を始められました。

Voice 利用者の声

佐々木由佳さん
(2023年に東京都青梅市から移住)

賃貸住まいで地域を知り、定住へ

町営住宅に2年ほど住み、昨年、今の若者定住応援住宅へ入居。隣の青梅市に住み、奥多摩に親戚がいる私でも、遊びに来ると実際に住むのとは違ったので、先の2年間は奥多摩を知るための良い期間となり、定住住宅への申し込みの自信となりました。今の住まいは定住応援補助金を活用し、リフォーム完了。おかげで、DIYが苦手でもきれいにすることができました。

5 子育て応援住宅

子育て世帯の定住を後押しするために整備された、町営の戸建て住宅である。最大の特徴は、22年間住み続けることで、その住宅が入居者に無償譲与される仕組みにある。使用料は月額5万円を基本とし、中学生以下の子どもがいる場合は1人につき月5,000円が減額される。



使用料

50,000円/月
(中学生以下の子ども1人につき5000円/月減額)

Voice 利用者の声

森泰孝さん
(2018年に埼玉県さいたま市から移住)

念願の庭のある暮らし

奥多摩への移住の動機は、田舎暮らしに憧れがあったこと、テレビ番組での空き家特集に心惹かれたこと、子育て環境としても魅力を感じたことでした。まずは空き家バンクに応募した後、現在は子育て応援住宅に住むことができ、念願の庭のある暮らしを満喫しています。川の音や鳥の声で目覚める朝に、とても満足しています。

6 分譲地・町有地

町が開発した宅地を安価に購入することができる。分譲地・町有地の販売価格は、約150万円~約460万円。広い土地を自由に使うことができる。

年齢条件

- ① 45歳以下の夫婦
- ② 高校生以下の子どもがいる世帯
- ③ 35歳以下の単身者

7 空き家バンク

空家等の有効活用による地域の活性化と、町民と都市住民との交流拡大を図ることを目的として開設されたもの。空家や宅地を所有されている方々に賃貸・売買の物件情報を登録いただき、奥多摩町に定住を希望される方に対して町のホームページで情報を紹介するシステム。空家バンクをご利用いただくためには、物件提供者及び利用希望者それぞれの方の登録が必要。

Voice 利用者の声

曾田夕紀子さん
(2015年東京都台東区から移住)

古民家との出会いが移住の決め手

自然豊かな土地で暮らしたいという願望があり、浅草から移住。都心にも出やすい西多摩エリアで約2年かけて物件を探した末、奥多摩の空き家バンクで賃貸の古民家物件を見つけ、内覧して即決しました。環境も良く、住居としても気に入ったため、移住から5年後に同物件を購入。その際、定住応援補助金を活用できたことも、とてもありがたかったです。

奥多摩の住まい情報、まとめて受け取れる

奥多摩に暮らしたい人登録バンク

町営住宅や分譲地などの募集情報を受け取るための登録制度。登録者には、町営若者住宅や若者定住応援住宅、分譲地といった定住関連の情報が、メール等で配信される。登録は専用フォームのほか、所定の登録カードを提出する方法でも受け付可能。住宅ごとに年齢や世帯構成などの条件が設けられているため、該当する制度の募集情報をタイムリーに受け取れる点の特徴である。なお、この制度では空き家バンクの情報提供は行っていない。あくまで、町が管理・提供する住宅施策に関する情報発信として位置づけられている。

奥多摩町 子育て定住推進課 若者定住推進係

TEL 0428-83-2310

移住して働く人を、最大100万円でサポート

奥多摩町定住促進サポート事業支援金

奥多摩町への移住・定住の促進及び中小企業などにおける人手不足の解消に貢献するための制度。都内条件不利地域以外から奥多摩町に移住し、就業又は起業した方に対して、**最大100万円**の支援金を交付する。

就業の場合 **30~60万円**
企業の場合 **最大100万円**

※申請に際し、細かな条件あり

Edit & Text & Photo: Yukiko Soda [miguel] Miguel Utsunomiya [miguel] Art direction: Atsushi Kodani Design: Yasuko Kitaguchi Illustration: Toshiyuki Hirano
発行:東京都奥多摩町 https://www.town.okutama.tokyo.jp 編集&制作:株式会社ミゲル 〒198-0101 東京都西多摩郡奥多摩町大丹波640 miguel@dg8.so-net.ne.jp http://www.miguel-web.info
2026年3月発行 本誌は奥多摩町内の各観光施設、協力店などで配布しています。店頭などで無料配布にご協力いただける施設を募集中です。ぜひお問い合わせください。

